

はぬ支那はどう見ても謎の國である。

第三は本題の勸善懲惡の佛像である。現代支那の田舎は、丁度わが明治中期を髣髴させるレベルでしかない。その無智を利用して、これを善導する實物教育の標本が、杭州の寺院内に所謂勸善懲惡の二像として祭られて居る。

わが國でも、楠正成を善として崇拜し、尊氏を逆賊として足蹴にしたやうに、この寺院内には「積善の像」と「極惡の像」の二堂が隣り合せて祭られて居る。一方「積善の像」の方には參詣者の後を断たず、花や香があげられ、賽錢を寄捨して居るが、「極惡の像」の慘狀は言語道断、瓦礫を投ずるなどはまだしも、お調子屋支那の惡童連は尿を放ち、甚だしい者は新聞包の糞を像にブツかけると言ふ極端な憎み方である。

この寺院は由緒古き伽藍として信徒も多く、廣い境内は鬱蒼として神々しき山紫水明の神域全く俗氣離れた神境なるにもかゝはらず、唯一つ、この「極惡の像」のみが臭氣糞々として鼻もちならぬ汚所となつて居る。

この聖域からこの汚所を除けば、寺内はどれほど淨化されるか判らない。然し、この善惡の

二堂宇こそ、この寺院の特異性であつて、大衆濟度の大使命となつて居るのである。かくまでの實物教育によつて支那大衆を善導する眞摯な佛の教へや、汚所をもつて寺の誇りとする宗教に對しては自ら頭の下るを禁じ得ないものがある。

## 第五章 享樂第一主義

### 一、享樂王國

「享樂王國」の名の續くかぎり隣邦支那は謎の國と言はれ、正常な國家に非ずと喝破され、死者の豚等ときき下されるこの幾つかの不名譽な侮言に甘んぜざるを得ない。

支那の四大道樂と言はれる「吃」、「賭」、「嫖」、「戲」が支那の向上を禍するとして蔣介石が新生活運動提唱によつて陋習打破に乗り出してから既に數年になる。

「世界料理の王座を占むるものは支那料理」「世界に冠たる阿片王國支那」、「世界の賭博王國支那」、「世界一蓄妾民族支那」、「世界娛樂のナンバーワン麻雀」等々あげて來れば、支那は將に世界の「享樂王國」たるべきすべての條件を具備せる國と言へやう。

#### 一、料理王國

味、量、値の三拍子揃つた點から言つても支那料理は「世界料理の王座」と言つたとしても敢て異議を挿むことは出來まい。

卓上山と積まれた贅澤な料理、山海の珍味、酒池肉林の大宴會……、かくて社交も、儀式も取引も舌の享樂を仲介として行はれる。

殊に安價な點では一升二十仙位から飲める支那酒だから陶酔境に入るのも調法至極で、どの點から考へても支那料理は自他共に許す世界料理の王座にあり、支那インテリの希望たる「洋館に住み、日本婦人を妻として、支那料理で生活す」ことを人生の理想とすると言ふのを見ても支那料理の眞價は絶對的のものと言へる。

#### 二、阿片王國

阿片と言へば支那人が浮び、支那人と言へば阿片を聯想する、それ程支那人と阿片は密接不離のものである。

阿片の享樂は飲酒その他すべての享樂の上であり、酒は何事も忘却するが阿片は意識明瞭而も××を滿喫し、酒は外に元氣を發散するが阿片は體内に××を蓄積する。その陶酔境は全く

天國に遊ぶに等しい恍惚境を往來するとは阿片家の等しく語る處である。

賭博王國支那の麻雀は、あらゆる階級に於ける支那人の常習となつて居るが、場合によつては二宵、三宵を徹し、勞れを覺ゆれば阿片を吸つて精力を増し、最後の勝利を得る場合にこれを利用することは最も効果的と言はれて居る。就中支那の金持階級は多くの妾を蓄へ、これを本等に××××××××は、この阿片によつて補給する以外にないと言はれて居る。

阿片吸飲はあらゆる享樂の上であり、これによつて他の道樂を制すること易々たるものと言はれ、金持の家庭では幼童からこれを習慣づけて他の道樂を制するの具にした事もある。

どれ程忙しいビジネスアワーにも、慌だしい外出の前にも、スバリ／＼、悠々と天國に遊ぶ恍惚境、阿片享樂の快味を忘れることのない彼等である。

### 三、賭博王國

運命論者と言はれる支那人は、上は要人大ブルジョアから、下は苦力ルンペンに至るまで、賭博のスリルに魂を打込まない者はない。

新生活運動で「賭博は國を亡ぼし身を亡ぼす悪習である」と言つて嚴に禁じて居るが、先祖

代々の博徒であり、周囲がすべてこの道の常習者である彼等にとつて、よしんば鳴物入りの宣傳であつても蚊の鳴くほどにも聞える筈がない。

支那人の博突に對する觀念は、徹底的に運と不運によつて現金を取引する一種の商取引だと心得て居るから、彼等に向つて賭博は罪惡だ等としかつめらしく言つて聞かせても、誰一人として耳を藉す者はない。彼等に言はすれば、運と不運に現銀を賭けるだけが賭博ではない、戰爭も國と國との大賭博なら政治も商取引も、保險や富籤、競馬は勿論、政府賣出しの航空獎券に至るまでこれみな賭博ならざるはない、而も他のすべてを許す處か却つて獎勵しておきながら自分の現銀を運と不運に賭けることだけを禁止すると言ふ不合理は承服出來ない。

よしんば政府が禁止命令を出しても、裏には裏があつて思ふ存分博突は樂しめる、骨を折らずに運次第で一夜の内に成金になれるとすればこれ程結構な商賣は他にない、と言ふのが一般支那人の持論だから仕末に負へない。

支那は世界に冠たる賭博王國と言はれる國柄だけに、賭博取締の任にある巡查といへども賭博好きで、路上至る處に骰子を弄ぶ苦力等の「四五六賭博」を立見に夢中になつて居る位で、

禁止令の本家本元たる政府要人がその道の猛者揃ひと言ふ徹底した賭博の國である。だから博徒の親分格が烏滸がしくも禁止令を出し、直接取締の任にある巡査が好きであり、一般支那人が常習者である以上、「博奕王國」の王座は揺がざること盤石の如しである。

## 四、蓄妾王國

支那の生活面を認識しない人々に、支那の金持には數十名の妾を持つて居る者がある等と話しても、無條件にこれを受入れる者はあるまい。

銀と暇のあり餘る支那の恵まれた連中は、尠くて數名、多い者は十數名から數十名の妾を蓄へ鶏舎に於ける雄鶏のやうな生活を續けて居る。近年新生活運動によつて生活の改善を唱へ出し蓄妾非難の聲が喧ましく叫ばれるにつれこれ等を平妻と勝手に呼び換へ、平等に寵愛するその絶倫振りは美食健啖と共に驚歎の外はない。

殊に昔の上流貴族が女に纏足を強ひ、一生を不自由なトウ・ダンスで暮らさせる風習を作つたその變態的愛玩に至つては言語道斷の蠻行と言はねばならぬ。

## 五、麻雀王國

享樂王國の支那人によつて發明された麻雀は、興味から言つても長く楽しめる點から見ても世界遊戯の王座にあることは何人も異論を唱へる者はないが、それだけ弊害の多いことも亦否定することの出来ない事實である。

世界至る處南京虫と麻雀のない處はないと言はれて居るが、麻雀は亡國遊戯としてあらゆる國がその取締に手を焼いて居るにも拘らず、非難と壓迫を尻目に却つて隆盛の一途を辿りつゝあり、とりわけ本家支那は大本山として、享樂支那の趣味にピッタリ合致せる關係上、何と言つても麻雀王國の名に叛かないものがある。されば支那のどの家庭を見ても、たとへ赤貧洗ふ無産者といへども、一組の牌を備へない家庭はない。

苦力等の持つ牌は一組二元程度の骨薄大型牌で、而も十數年來使ひ古した垢と油で文字も辨ぜない、凡そ骨董價值の出そうな代物である。

上海に於ける夏の夜の散歩は軒毎に洗牌の音を聞き、全上海に幾千、幾萬の人々が麻雀に魂を打込み、巨額の現銀を取引して居るか殆んど想像も及ばないものがある。而も長きは二宵三宵と連続的享樂に耽るに於ては、まさに亡國遊戯と非難されても辯解の辭はあるまい。

支那では要人金持ほどの遊びは激しい。彼等の宴會に次ぐものは必ず麻雀であり、而も大金を賭け夜を徹するのが常である。これでは自然生活も享樂遊情に流れ、眞面目な生活は出来なす。

凡そ前清朝時代の大官ほど麻雀を享樂した者はないと言はれて居る。彼等の出勤は毎日午後二時を過ぎそれから宴會となり麻雀となるのが一日の日課であつた。こんな徹底した遊情な生活が自然政治向にも表れ遂に清朝を亡ぼすに至つたと言はれ、麻雀亡國のサンプルの如く言はれて居る。

躍進支那の國民黨部ではこの惡弊に業を煮やし、新生活運動によつて官吏の麻雀を禁止するに至つたが、全支那人の麻雀は支那民族の存する限り、南京虫と共に未來永劫これを禁絶することは不可能であらう。

## 二、阿片王國

阿片といへば支那人を思ひ、支那人といへば阿片を聯想するほど、支那人と阿片とは別個には考へられないものとなつてしまつて居る。

いくら人道問題をかつき出しても、國民黨部が新生活運動などで、やかましく彈壓して見ても、支那民族の存する限り、撲滅はおろか抑制すらも困難なことは、上海至る處にある阿片痛を一寸覗いたゞけでも合點がいく。

歐米あたりで生れた若い輸入支那人が、支那氣分に馴れない中こそ、等しく阿片の害毒を説き、亡國に導く毒藥と貶してその撲滅に狂奔する者もあるが、彼等とても支那の生活に馴れ、功成り財を得て、愈々享樂生活に入る身分になつて見れば、例外なしに阿片またはその製劑なしでは生活出来ない人種になつてしまふ。

「朱に交れば赤くなる」といふが、支那の阿片はそれにも増して阿片黨をつくる。最初は石部金吉のやうな堅人でも、支那全土に漲る世相全體の雰圍氣たる阿片境に一步々々、夢遊病者のやうに引込まれて行くのを如何することも出来ない。

わが國で、來客に對つて煙草や茶をすゝめたり酒を出すやうに、支那人は極めて軽い意味で、

阿片を接待するが、一番感染し易いのは遊場だ。仲の良い遊び友達から勧められたり、好きな女から一寸一服などと持ちかけられた気分はまた格別で、マア少し位はよからうと、好奇心も手傳つて、満更でもない氣持から、ついフラ／＼と手出しするのが病みつきで、度重なれば中毒して歴つきとした阿片黨になつてしまふ。

支那家庭に於ける阿片吸飲室は、普通一番奥詰まつた薄暗くて通風のよくない小室を利用され、寢臺に寝そべつたまゝ、長い時間を、スバリ／＼天國に遊ぶ享樂にふけて居る。

阿片黨は、阿片室に片足踏み込んだゞけでも魅惑的、挑撥的な氣持で一杯になるといはれ、寢臺に着くと同時に無我の境を逍遙ひ、銀も名譽も、地位も女も、あらゆるものに超越し「天下それ何ものぞ!」といふ大きな氣持になるといふが、この天國に遊ぶ恍惚境は、天上天下唯我獨尊、阿片を知らない人種は生き甲斐のない人生の落伍者のやうに見えるといふ。

二世紀半も前のこと、イギリス帝國主義が、甘い支那さんに押賣りした毒藥阿片——この阿片のために財を失ひ、健康を損じ、あたら一生の前途を擲つさまは、恰かも飛んで火に入る夏の蟲を髣髴させる。然り、阿片黨の人生は阿片以外の何ものでもなく、深入りするにつれてル

ンベンの群に陥ち泥棒に轉落、枯木のやうに青白く瘦せ衰へた身體を、とゞの詰りが阿片室を最後の墓場として一生の幕を閉ぢるのが常である。

一旦阿片癮者に轉落したが最後、それこそ二度と再び、浮ぶ瀬のない人生の敗殘者となつてしまふ。彼等は阿片の前には餓鬼に等しく、如何なる勇氣も、これに打克つことは出来ない。

國際聯盟などで、落伍者製造の毒藥阿片吸飲をもつて、人道上山々しき重大問題となし、相當八釜しく論じ、且つこれが撲滅に大重となつて居ることは衆知の事實で、特にそれが、世界の阿片王國といはれる支那に向けられて居ることはいふまでもないが、支那の吸飲者等にいはせると、自ら招かざる支那に阿片を押賣りして、現代支那阿片吸飲の基をつくつた惡魔こそは、さういふ國際聯盟を操るイギリス自身ではなかつたか、我利々々の獨善主義から、支那を犠牲にする毒藥阿片を押賣りしたばかりか、世界戦史上の汚點といはれる阿片戦争をデツチあげ、その生證據ともいふべき香港まで失敬しておきながら、今更撲滅や抑制が聞いてあきれ。何處押せばそんな音が出るか、チャンチャラ可笑しい限りだ、と空嘯いて居る。

いくら側から道德問題を擔ぎ出しても、どれだけ理論的に説明しても、今日に於ける支那の

阿片は理窟や議論で割りきれれるほど生柔しいものではない。

現代支那の阿片こそは支那人の命であり、生きる糧となつた以上、どんな力をもつてしてもこれを除くことは出来ない。彼等から阿片を奪ふことは、彼等に死を與へる以外の何ものでもない。

支那を滅亡に導く毒藥阿片の取締とか彈壓に就いては殆んど二世紀以上に亘つて試みられて來た。香港といへば阿片戦争を聯想するが、この阿片戦争も支那當局の拔本塞源的彈壓に對するイギリス帝國主義の横槍による實力の發動で、支那にとつてこれほど迷惑な戦争はない。現代支那も國民黨あたりで、阿片の取締には躍起となつて居るが、中毒者即ち癮者は登記さへ受ければ吸飲を許される關係上、公然の阿片黨も相當數にのぼり、法の裏をくぐる阿片窟もまた尠くないから、禁止はおろか抑制などは思ひもよらぬことである。

靜かな阿片吸飲室で、浮世離れて何の苦勞もなく、スバリ／＼とやつて居る陶酔の快味は言語に絶すると言はれて居るが、中毒患者が阿片に見離された時ほど哀れなものはない。水のきれた金魚か、陸に上つた河童のやうなもので、わが國でもアルコール中毒で苦しんで居るのを

時たま見ることがあるが、それとは全く較べものにならぬほどの強烈な中毒症を呈し、殆んど半死半生の重病人を思はせるやうに、ガタ／＼慄へながら眞青な顔になつて居る。ところが、この半死者に一服の阿片を與へたその靚面な效きめには、何人も驚かすには居られまい。即ち今まで死人のやうに硬直して居た顔面は、見る見る紅潮を呈し、別人のやうに颯爽たる健康者に急變する處、百聞も一見にしかずである。

現代支那は、蔣政權の新生活運動によつて阿片の吸飲を禁じ、嚴重なる登記制を實施して居るが、これとても支那のことだから良い加減なもので、一向に實蹟があがらないことはいふまでもない。

「親の因果が子に報ひ」のたとへの通り、阿片中毒者の子供は生れながらの阿片癮者となる場合がある。これ等は母親の胎内にある間に、その吸飲に感染したもので、かういふ赤ん坊が火のつくやうに泣いて居る時など、母親が阿片の煙を吹つかけただけで即座に泣きやむ靚面な現實がその證據で、未怖ろしい子供もあつたものではないか。

十年ほど前までは、上海至る處に阿片吸飲所があつたが、新生活運動の彈壓を喰つて近時殆

んど地下に潜つたため、上海名物の一つが見られなくなつてしまつた。

最後に世界で一番穢い戦争の一つに數へられ、支那の阿片とは密接不離の因果關係にある、阿片戦争とアロー號事件を述べよう。

### 阿片戦争

阿片戦争とか香港の名前を聞いたゞけでも、イギリス帝國主義の残忍極りない海賊史が聯想される。阿片の害毒は阿片窟を一寸覗いたトタンに戦慄を禁じ得ないほど、全くこの世ながらの餓鬼道である。支那の爲政者は勿論、國際聯盟などが、その抑制に大童となつて居るのを見ても、その被害の猛烈さは押し知るべしであるが、この猛毒をもつ阿片を、而も自國で禁止しておきながら我慾のために支那に押賣する等は言語道斷、この獨善イギリスが國際正義や人道問題を云々する資格が何處にあるかといひ度い。

イギリスから支那へ向けて輸出される阿片は、インドの農民から極めて廉價に搾りあげたもので、これによつて巨利を博して居た獨善イギリス人が、今度は覺醒した支那が拒むやうにな

つたからといつて、遠慮會釋もなく軍艦を差し向け、支那の樞要地區を片端しから占領したが、この名譽ある大英帝國海賊戦史の一たる阿片戦争である。

英領印度に、東印度會社と稱する英商があつて、廣東公館の手を通じて毎年一千萬兩<sup>テイル</sup>から三千萬兩<sup>テイル</sup>ほどの阿片を支那に輸出して居た。阿片の猛毒のみならず、尨大なる現銀の海外へ流出は支那にとつてなかくの大きな問題で、支那側としては頭痛鉢巻だ。國力の疲弊を憂へて再三再四禁止を發令したが、相手が悪い。老獪なイギリスではなかく根絶される處ではない。のみならず支那側も、廣東商人等が「公行」といふものを組織して、一定の保證金を積んで外國貿易の特權を握り、總督府の役人等をコミッションで取込み、半ば公然と阿片貿易をやるのだから全く仕末に負へない。

阿片戦争の起つたのは丁度今から百年程前で、阿片を支那に輸入したのは二百五十年にもなるから、その間凡そ百五十年の長きに亘り、支那の爲政者等は我慢に我慢を重ねて來たのであるが、阿片戦争の前年、即ち一八三四年の九月に林則徐といふ清廉剛直の士が廣東總督となるに及び、決然として彈壓を強行し、イギリス人は勿論、廣東在住の外國商人全部に對つて、阿



片の在庫品全部の提出を命じたのであつたが、これをイギリス商人が拒絶したため、硬骨林總督は斷乎軍隊を繰出してイギリス商館を包圍して、館内二百名のイギリス人男女を隔絶して飢饉状態に陥れてしまつた。當時に於ける外國人は一定區域以外の居住も外泊も許されない規定となつて居たから、この英商館の隔絶は百年後に皇軍のとつた天津英租界隔絶のやうに寛大なものではなく、命にも拘るほど急なるものであつた。

だが然し、こんな強硬態度に恐れ入りました、と引込むやうなイギリスさんとはイギリスさんが異ふ。海賊の子は何處までも海賊だ。司令官エリオット海軍大佐は直ちに軍艦を驅つて廣東に來り、總督に直接交渉したが林先生シヤン挺でも動かない。ニベもなくお斷りを喰つて、さすがのイギリスも途方にくれた。然し人命にも拘る隔絶商館の救出は何といつても先決問題である。腹に一物こゝは辛抱が肝要と、支那側の要求通りおとなしく、二萬兩以上の阿片を引渡した(阿片戦争終結と同時にこの償金六百萬兩チャイナといふ法外な賠償金をせしめたが)。

當時、老獺イギリス側の腹の内では、今戦端を開いても募兵よく支那の大軍との太刀打は出來ない。こゝは一番辛抱して、今に見ろツ！と心中期するところあつて在留民全部を香港ま

で引揚げさせた。

支那側から主だつた十六名の英商處罰方を要求して來たが、香港引揚げを完了すればこつちのものだ、エリオット大佐は全然黙殺しながら、孜孜として戦備を整へる事に専念して居た。その間凡そ一ヶ月、沈黙を續けて來たイギリスが、全く藪から棒に戦端を開き、珠江碇泊中の清國軍艦三隻まで撃沈してしまつた。そして翌年四月には二十六隻の艦隊と、一萬五千の陸兵を以つて侵略を開始、南支沿岸を次々に占領し、七月には北上して天津、北京を衝くべく陸軍を派遣した。

驚いたのは清朝だ、享樂を事として居たダラ官ども、お膝下の北京にまで敵軍が進撃しては對岸の火災視する事も出來ない。急遽御前會議を召集した結果、一旦和を乞ひ敵に油斷させ、英軍の撤兵するのを待つて大軍を召集する所謂「緩兵の計」といふペテン外交をやつた。現代支那のペテン外交は世界衆知のものであるが、當時はそれほど有名なものではなかつたと見え、さすが老獺のイギリスも、初めてのことで、まふまふ一杯引懸かつてしまつた。即ち、責任者たる廣東總督林則徐を免職して穩健なる琦善を後任總督とし、講和談判の地を廣東に、香

港を譲り、焼いた阿片二萬餘函の代償は御希望通り差上げます、その他何でも御相談に乗りませう……といふのだから、あんまり話が甘過ぎる棚ぼた條件、老獺イギリスに否應のあらう筈はない。ところが、安心しきつて晝夜御馳走攻めに目尻を下げて居た、エリオット大佐の不意を襲つて五萬の大軍を南支に急派した。

老獺とベテン、狐と狸のだましあひ、この徹底したベテン外交も悲しいピエロに終つた。即ち激怒したイギリスの總收穫が所謂「南京條約」である。この條約によつて二千一百万兩の賠償金をせしめられたが、百年前の二千一百万兩が如何に大金か……、この大きな金が、高い税金となつて民衆から搾られるため、民衆の不平は反英となつて現れ、その後長い反英抗爭が続けられ、遂々清朝の命とりとまでなつたとすれば、清朝を亡ぼしたものはイギリス帝國主義である、ともいへないことはない。

### アロー號事件

問題の船アロー號は元々支那の船であるが、當時イギリス商人にチャーターされて居た。厦門

から支那人船客十二名と商品を積んで廣州市に入港して來たが、清朝の役人が臨檢して見ると、商品は阿片であり、船客は逆賊であつたので、全部これを逮捕沒收した上、御念の入つたことにはイギリス國旗まで奪つてしまつた。アロー號船長（イギリス人）の報告によつて激怒した廣東領事パークス（今は地獄に居るが、幕末日本當局を手古すらせた彼の暴慢なる駐日イギリス公使）は直ちに極東艦隊に出動を命じた。今も昔も變らぬ便乗主義のフランスまでがこれに加擔して南支は勿論、天津、北京まで占領した結果が天津條約となり、現在の如く支那は列國の半植民地となる下地を作つたのである。かくして支那はレブラ患者の様に、外國權益、租界、租借地など、我身で我身が自由にならぬ半身不隨國となつてしまつた。

### 三、ホテルで見る支那人の享樂

支那の田舎旅館は、一般に設備なども不完全な、通風のよくない支那建てで、穴藏のやうな感じがするが、都會地に於ける支那ホテルは、日本の旅館に較ぶれば遙かに近代的である。

十數年前に經營難でやめたマゼスチック・ホテルは歐米一流ホテルにも劣らぬ堂々たるもので、至れり盡せり、正に東洋の殿堂といつても過言ではなかつた。

現在上海の支那ホテルは、何々飯店といつて、大馬路の競馬場一帯を中心として、日本の一流ホテルに比すべきものだけでも、大中華飯店、遠東飯店以下數十に達し、その經營なども、日本の宿泊本位と異り、娛樂本位によつて客の吸収に努めて居る。

いくら上海が大都市であり、國際都市であつても、數十の一流ホテルが年々繁昌し、堂々利益をあげるといふことは一寸不思議にも考へられるが、そこは日本の宿泊本位に反し、娛樂主義による支那ホテルの特異性が、支那大衆の趣味にピッタリ合致して居るからである。

支那ホテルの特異性は、ホテルが娛樂場であり、社交場であり、儀式場であり、宴會場である。だから日本にすれば、ホテル、料理屋、俱樂部、ダンスホール、待合、浴場、娛樂場を一つに纏めたやうなものである。

支那一流のデパート永安公司、先施公司、新々公司、大新公司なども、デパート内には何々旅社といふ立派なホテル部があつて、劇場もあれば娛樂場、浴場などの完全な設備をもつて居る。

このやうに廣範圍に亘り、支那人の享樂性に迎合して廣義に活用されるから、婚禮その他の儀式、社交、取引に至るまで利用され、その繁昌はいふ迄もない。

エロティシズムの支那には公娼はない。その代りに私娼の跳梁は大變なもので、ダンスホール、劇場、茶館その他娛樂場、賭博場など何處へ行つても手軽に、安直に賣笑婦を拾ふことが出来る。

普通ホテル内にも十人乃至二十人位の賣笑婦が、廊下の長椅子にズラリと並んで居る處もあれば、廊下トロンビをやつて居るところもある。夜が更けるにつれて、段々彼女等の數の減るのを見れば契約成立の證據で、減多にお茶引く者はないとは、ホテルのボーイの言葉である。

それ等の契約金(?)は、女のレットテルや時間によつて相場も種々であるが、最高×元から夜が更けるにつれて×元位になることもある。

ホテルのボーイは賣笑婦の提灯持で、泊客に對してはシッコク女を勧める。契約金もボーイの裁量にあつて、客によつてその値も異つて来る。さうして契約高の二割見當がボーイの懐に入るのが普通である。

かういふ別収入が種々あるから、一流ホテルのボーイの収入はたいしたもの、従つて相當高い権利となつて居る。

×人の一夜アベツクは、以前は多く北四川路のムーンパレスやガーデンブリツチ横のアスタールハウス等を根城としたものだが、新亞ホテルが出来て以來、そのお株を奪はれてしまつた。新亞ホテルの室料は、五元以下はバスなしで室も小さいが、六元以上は相當立派なものである。日本のホテルは室料制度といつても、人数によつて料金が違ふが、支那のホテルは一人でも三人でも同値であることは頗る重寶に出来て居る。

夏の夜を支那街の支那ホテルで遊ぶことは、眞の支那情緒を満喫する陶醉境だ。二百以上の客室から流れて来る麻雀、骰子賭博、遠く聞ゆる胡弓や明笛に合せて、或は高く或は低く餘韻嫋々、泣くが如く訴へるが如く、面白をかしく歌ふ支那歌特有の情緒、廊下には右往左往獲物を漁る街の天使、喧嘩、甲高い小先生の歌、アベツク、ランデヴー等、々……支那料理、支那酒、支那茶、阿片、纏足……支那ホテルの一夜は、支那情緒を満喫する歡樂の全支那だ。

#### 四、泥酔しない支那人

大上海に支那人多しといへども、在留邦人中、曾て路上に支那人の泥酔者を見た者はあるまい。上海の酔つばらひとへば、大抵アメリカ人が、大きな聲ではいへないが、わが日本人と相場がきまつて居る。

支那酒は非常に安い、支那には一升二十仙の酒がある、といつても大抵の人は『そんな酒が飲めるか』と頭から問題にしない人があるかも知れないが、上海あたりの飲助日本人に大歡迎される處を見ると、満更飲めない酒でもないらしい。

享樂第一主義の支那人が、この安い支那酒で酔つばらはない筈はないと考へられるが、現實は左に非ず、絶対に泥酔の醜體を見せない處、支那人にこの自制心のあることは、如何にも不思議千萬なことであるが、それは古來支那の世相が自然に習慣づけたものである。

一般に支那人は、飲酒家よりも健啖家の多いことは事實であるが、それにしても、享樂する

ことにかけては敢て人後に落ちない支那人が、飲酒の度を過ぎない現實は合點が行かない。だが何事にも支那人の所謂「理」によつて善處することを忘れない彼等には、一種飲酒哲學といつたものがあつて、その「理」によつて酒を適量に制すると解すべきである。この飲酒哲學をあるインテリ支那人に聞けば……「凡そ酒を飲んで泥酔するほど底の知れない阿呆はない。折角飲んだ酒を泥酔によつて無駄にすることは、第一高い銀を拂つた價值がないばかりではなく、折角氣持よくなつたホロ酔機嫌を深酒のために前後を忘却し、おまけに宿酔<sup>フツカヨヒ</sup>など、苦しい思ひをする等は眞の享樂とはいへない。それよりも泥酔する量を、チビリ／＼と何回にも享樂することが、飲酒の第一義でなければならぬ」といふ、支那人の「理」によつて判然りした觀念によつて善處する處などは、酔虎日本のよろしく味ふべきことではなからうか。

かういふ常識によつて飲酒を樂しむ支那人は、決して無理酒を飲まない。さうして自分の適量を辨へて、それ以上度を過ぎないから、結局支那の酔つばらひは絶対にない理である。彼等は酒の味を享樂するために飲むから飲酒中を樂しみ、酔心地を樂しむ。

ところが、酔虎日本の飲助連は支那と全然反對で暴飲が多いから、とんだ酔虎傳がもちあがる。彼等にいはすれば、後藤又兵衛日本號の槍飲みや、大石藏之助の忠義酒、堀部安兵衛の喧嘩酒を禮讚、豪傑酒を好むといつて、英雄、豪傑にあやかり、その流れを汲むかの如くふいて居る者もあれば、「酒は呑むべし百藥の長」など、六神丸か萬能丸の廣告のやうに言ひふらして居る。酒は涙か溜息か、自棄で飲む酒は何處までも酔はない、失戀男や借金苦の吞兵衛は、憂を掃く玉箒など、勝手な屁理窟を並べ立て、飲まない人種を謹嚴居士と敬遠するやら、話せない男と貶して居る。

相手なければ獨酌を樂しみ、相棒を見れば好き敵御座んなれ！と意地で飲む。豪傑大酒の茶碗酒、思ひ明かせぬコップ酒、井酒なら賭けで飲むなど鼻息の荒いこと、この獨り良がりを支那人に言はすれば底の知れない大馬鹿者と喘はれても仕方がない。

支那人のやうに判然りした「理」によつて飲酒の度を過ぎない以上、彼等の路上泥酔者を見ないのは當然で、室内に於ても、彼等は深酒で前後不覺になるやうなことは滅多にない。

また支那のやうに警察權の不備な處で、而も人の見ない處では、どんなことでも平氣でするといふ物騒千萬な國柄では、泥酔して前後不覺になつて居る中に銀は勿論、身ぐるみ持つて行

かれる危険性があるし、うかくすると、たつた一つの命まで消えて失くなる國柄である。さういふ危険は支那の一つの社會相であつて警察權なども、國があまり大き過ぎるためなかく纏りがつかない。第一戸籍のない支那だから、人命の貴さをそれほど重視しない人種で、その上支那は古來内亂が多く、個人の安全といふものが保證されなかつた關係もあり、自分は自分で護る以外にないことが、彼等の自制心を起さずに大きな効果があつたともいへる。

## 五、洋風に近い支那生活面

隣りあはせた日本と支那は、同種同文、千數百年の修交關係にある處から見れば、その風習等は相對的に相似て居なければならぬが、その實對的に相反するばかりか、支那人の生活面が、遠い歐米に類似して居る等は、何人も不審を懷かすには居られまい。

明治維新以前に於ける日本の文化は、古來東洋の先進國であつた支那に負ふ處多く、ある時代の如きは、支那崇拜が流行の尖端となつて居たこともあつた。

かくの如く、同じ東洋文化、東洋文明の上に立つて來た日支が、どうしてこれほど相反するやうになつたか？ 日滿提携を東洋平和の眼目とせねばならぬ東洋人は、深く反省して善處することを心がけねばならぬ。

ではどんな點が歐米と支那が類似し、日支が相反して居るかといへば

- 一、家屋の構造——日本建築は主として木造で疊式となつて居るが、歐米も支那も多く煉瓦を用ひ、土間若しくは板張にドア、ベッド椅子テーブルを使用して居る。また日本家屋には特に應接室の設備はないが、洋館には勿論支那家屋にも、應接所といふものがあつて餘程親しい者以外、内房に接客するやうなことはない。
- 二、料理——日本料理は古來多く魚類を用ひ、極めて淡泊したものを好む風習があるが、支那も歐米も、主として肉類を用ひ、料理法なども油でいためて味を出す具合は殆んど大同小異といつて差支へない。殊に日本の各個式に反し、テーブルの上に山と盛つて出す處などは支那も歐米も殆んど同じである。

- 三、男女の權利——支那の女尊男卑、歐米の男女同權、日本の男尊女卑は今更議論の餘地がない。

- 四、文字の読み方——國語はすべて棒讀に上から讀みくだすが、支那語も英語も反轉不順である。
- 五、服装——日本は和服に下駄を履くが、支那服は一見歐米のピジャマの變形といつたやうなもので、上衣、下衣を着て、靴を履くところ等は歐風に似すとはいへども遠からずである。
- 六、頭髮——婦人の頭髮は近年歐米の流行が尖端となつて、支那の若い婦人は殆んど斷髮、理髮店は従來の理髮の看板を一齊に書きかへて男女理髮とした位である。日本も近時パーマネットが流行し出したが斷髮は非常に少く、封建時代の遺物ともいふべき日本髮黨が舊態依然として少くない。
- 七、社交——日本人は非社交家と折紙をつけられて居るが、萬事に解放的な支那人は、生れながらの外交家といはれる通り、歐米人にも増して社交に妙を得た國民である。
- 八、戀愛取引——日本の戀愛取引は殆んど秘密主義であるが、支那婦人の戀愛思想には近年超モダン風が見え、堂々戀をさしやき、手を組んでアベックする處など歐米流に近いものがある。

上述の諸項を見ただけでも、日支は殆んど對蹠的に相反し、支那が遠い歐米に似て居ることは首肯せられるものであるが、從來兎角シツクリした日支提携の出來なかつた原因の一つがこゝにあることもまた見逃がすことの出來ない現實である。

會つて日本留學者の某氏から日本の風習に就て、彼等の日本觀を聞かされたことがあつた。即ち「支那人は洋館に住み、洋食を食べて、洋服を着る生活は出來るが、日本の家に住んで、日本料理を食べて、着物に下駄履きの生活には堪へられない。

日本家屋は、通風や採光に優れた點はあるかも知れないが、木造で火災に弱く、不用心で安全を得ることは出來ない。殊に旅館などは紙一重の隣室に何者とも知れない赤の他人と隣り合はせる等は、終夜脅威を感じずには居られない。而も寢臺なしで、歩く疊の上に直接に寝る等は決して文化人の生活とはいひ難い。

また日本料理といへば大抵魚類を主體とし、漬物や梅干のやうな單調な料理では、食慾をそらないばかりか保健上の不安を感じずには居られない。

日本の着物や下駄履きに至つては最も苦手だ。ダブ／＼で締りのない着物、おまけに袖といふ袋までブラ下げて、下駄の上に乗つて歩く等は不活動的にも程がある。最も不活動的悪習は日本髪だ。臭い油をべと／＼に塗つて、兩翼を殊更突き出し、後部に方向蛇を持つて居る處は、如何見ても鳥を乗せたやうで美觀どころかナンセンスものである。

日本では素足のまゝ平氣で外出する婦人を見受けるが、支那では苦力階級ならいざ知らず、普通一般は男でも素足を見せるものはない。

古いものを大切にすることは良いことに相違ないが、日本の學生は新らしい帽子などを故意に汚して古く見せるといふ、氣狂じみた亂暴を敢てするには驚くの外はない。

日本留學中一番氣持良く感じたのは日本人が清潔を重んずる風習である。日本人は毎日入浴するから各所に共同風呂があるが、僅か五錢位の金で、毎日の垢と油をサツパリと洗ひ落すことが出来る。

無條件に禮讚すべきは日本婦人の貞淑である。男に叩かれながら謝つて居る圖は、支那は勿論、歐米の何處に行つても見ることが出来ない。貞淑ばかりではなく、家庭のきり廻はしから

子供の教育など、日本婦人の眞價はあらゆる世界婦人の上にあることは言ふまでもない……。

彼の日本觀から見ても、支那人が日本流の生活が出来ないことは明かで、日支が對蹠的に相反すると共に支那が如何に歐米に近いか凡そ窺ふことが出来る。同種同文、隣邦にあつて、千數百年の長い修好關係にありながら久しく對立を続け、遂に今日支那事變といふ最悪の場合に直面して居る原因の一つにこの習性の相違があるとすれば、誠に寒心にたへないものがある。

## 六、人生は歡樂から

日本人は楽しい遊びにも警察がやかましいとか、世間が五月蠅いなど、遠慮氣兼ばかりして、何事にも内輪にしたがる風習がある。殊に支那事變以來緊張に張りきつて居ることは非常に良いことではあるが、また反面、極端な緊張の後には疲労が伴ふことも考へねばならぬ。

聖戰中といへども、許される最大限度のユーモアと享樂が必要なことはいふまでもない。このユーモアも享樂も非常時日本國民を萎縮させるものではなく、大いに明朗化しつゝ能率をあ



げる生活の糧と心得べきである。

世は擧げて非常時であればなほ更微妙な人間心理を擲して、眞剣の内にも明朗を持し笑ひを忘れず、淡い××を失ふことなく、大國民としての襟度を持つことを忘れてはならぬ。

殊に衝にあたる者が、極端な××を矢繼早に連發するやうなことは三省を要する問題で、役人といへども多分に人間であることを考へ、生きた社會はどこまでも人間味を持たせておくべきである。

かういふ問題になると、支那は何といつても享樂王國、吾々日本人の想像も及ばない別世界だ。享樂支那にとつては、歡樂の前には國家なく社會なし、眼中法律なく道德なし、「人生は歡樂から」、これが思ふ存分滿喫出來ないくらゐなら、この世に生れた甲斐がないと考へる彼等である。この觀念によつて人生を享樂する歡樂の支那、××の支那、遠慮のない支那では、たとへ風紀取締の任にある恐いオチさんといへども、自らこれを滿喫することを忘れない享樂支那の一員である以上、どんな街はづれの享樂にも十分の理解があるから、何處からも文句の出る處がない。

わが國などでは、妾でも持つて居れば一種の變態性慾者のやうに言はれるから嚴秘主義をとり外聞を憚る風習があるが、支那の持つて居る人々は妾の數の多いことを一種の誇りとし、初對面の人々にまで吹聴するといふ極端なものがある。

會である支那人の自慢ぶつた話に、「先生一寸儲かりましたから、御祝に一杯差しあげませう」といふから、何で儲けたか、と聞けば、「女房を二百元で買ったのが、今度良い買手がついて三百元に賣れたので百元儲かりました」など、女房を恰るで牛か馬のやうに考へて居る者もある。

新生活運動以來亡國遊戲として、非常にやかましく自制を促されつゝある麻雀なども、支那人に自肅は猫に小判のやうなもの、猫に饅頭、支那人に享樂はつきもので、毎年正月前後になると、三日も四日もブツ通して麻雀會をやるが、その賭金なども倍増し勝負でやるから最後の賭金などは、どえらい大きなものになることがある。而も體力には限度があるから、その間一寸休憩しては阿片を注入してその精力を補給するといふ具合で、支那は支那らしく何ごとにも特有の大陸性的長期戦がお得意である。

今度の支那事變當初、上海の在留邦人などは、現地で見ると皇軍の辛苦に濟まない、といつて好きな麻雀も止め、ハイ・アライや競犬場などの賭博場は見向きもしない緊張ぶりを見せて居るが、支那人は、蘇州河一つ向ふに、喰ふか喰はれるかの激戦苦闘の眞最中でも、對岸の火災のやうにダンスや麻雀に打ち興じて居る。

支那古來の喫茶店たる茶館を一寸覗いて見ても、襟の高い支那服の野鷄（賣笑婦）等が、客席を縫つて胡蝶のやうに右往左往しながら鼻下長先生を探し廻つて居るが、交渉が成立すると同時に得意満面な彼氏は、天下の色男われ一人といはんばかりの恵比壽顔になつて、客席の誰彼に會釋しながら、お手々つないで出て行く圖などは、日本人にはとてもその心理をはかることは出来ない。

支那人からすれば、人間としてこの世に生れた上からは、出来る範圍の享樂をして見たい、と考へて居るから、遠慮や氣兼ねをする様な享樂は意味ない理で、例へば會食をするにしても、日本人は出来るだけ行儀正しく、食べたいものでも遠慮して箸をつけないなど、固苦しいこと夥しい。殊に厄介千萬なお客様は貴婦人方だ、半開の口で、小さなチヨコレートを三、四度に

御召しあがる處などは、お宅で焼芋を丸齧りになさるのとは全く別人の觀がある。これでは、いくら山海の珍味も味ないばかりか、招待した方も却つて御馳走のし甲斐がない。

その點支那人は、所謂盃盤狼藉の文字の通り、遠慮などはフツ飛ばして會食の意義を百パーセント満喫するから、どれほど愉快であり意義あるものか、殊に社交は支那式でなければ眞の妙味は出ない。

また賭博方面から支那人の享樂を見ても、賭博は一種の現金取引であり社交であると心得て居るから、殆んど公開的なものとなつて居る。日本の賭博前科何犯といふ常習者の檢舉場所を見れば、必ず同一場所で擧げられるやうなことはない。彼等は毎回場所を代へて、見張番まで立てるといふ用心堅固なものであるが、支那人は路上たると屋内たるとを問はず公々然と、時間と銀さへあれば骰子を弄んで居る。路上に立番の巡查が、「四五六賭博」の立見に夢中になつて居る圖は、一度支那を旅行した人々は必ず實見するところである。

かくの如く、人生は歡樂からをモットーとして、享樂の限りをつくす支那人の顔面を見たゞけでも福徳圓滿、何時見ても朗らかそのものゝやうである。

されば世界中、一番人生を享樂することにかけては、享樂支那の右に出るものはあるまい。

## 第六章 支那情緒

### 一、妻は銀なり

近代社會は、一般に自由主義の流行によつて、戀愛取引なども段々スピード化し、極めて手軽になりつゝあるが、因習的保守的な「蓄妾王國支那」は舊態依然、「男女七歳にして……」といふほどでもないが、非常にやかましい風習があつて、吾々の想像以上難しいものである。従つて支那は男女關係の不自然なことにかけては世界に類がない。

持てる支那人といへば、殆んど例外なしに妾をもつものと相場がきまつて居るが、普通數名から多い者になると十數名、數十名といふ、鶏舎に於ける雄鶏を髣髴させるものがある。またその反面には、妻を買ふ銀がないため、一生を養の河原の石ころのやうに獨身を餘儀なくされて居る者も決して尠くない。

支那は所謂「蕃妾王國」の名に叛かず、その生活ぶりは世界の奇觀といはれて居るが、このお妻さんが全支に百萬人あるとしても、その數だけの獨身男が出来上る理だ。ところが銀とエロティシズムの支那のことだから、お妻さんの數はとても他國人の想像も及ばない數にのぼつて居る。

女ならでは夜の明けぬ支那：銀と女が同視される支那では、女がプレミアム付ではけるのに反し、男の結婚難の深刻さは、無産者中一生獨身を餘儀なくされる者が非常に多い事實が立證して餘りある。

かういふ世相が段々女に權利をつけた結果が、支那は世界に類のない女尊の國となり、従つて妻を得るためには相當な銀を用意せねばならぬ風習を生み、結局女は銀であり、銀の身代りであるといふ現代支那の世相となつたのである。

結婚に結納金を要することは獨り支那だけではない。わが國等でも、仕度金とか結納金の名において應分の金品を贈る慣例は五十歩百歩であるが、わが國の結納金は、必ずしも贈らねば嫁が貰へないといふ絶對的のものではない。場合によつてはアベコベに持參金付や、新郎の洋

行費負擔を條件にする等、タナボタ式の結婚も珍らしくない。ところが支那の結婚となると餘りにも嚴格で、銀を呉れなければ娘はやらぬ、といふ鐵則があるから、結局「妻は銀なり」に相違ない。

支那に於ける婚儀のやかましいことは世界衆知の通りで、吾々から考へれば、身分不相應にも考へられ、馬鹿々々しい限りであるが、支那の風習からすれば極めて自然で、どんな身分の者でも簡単なスピード結婚は、双方の面子や結婚の重大意義上許されない。

この結納金と婚禮費用を合せた銀額は驚くほど大きなもので、これだけの銀がなくては結婚することの出来ない支那に、餘儀ない獨身者の多いことも「アツタリマヘ」である。

かくの如く、支那の結婚といへば一生一度の大儀式であり、大きな犠牲を拂つて得た妻なればこそ、萬一病死されたり、逃げられでもしたら百年目、銀と同じやうに命にもかへ難く大切にすから、自然女權が強くなり、無智な婦人の横着も通る理で、その實例が「めん鳥があしたを告げて支那亡び」である。

無産支那の金儲け三原則といはれる「良い女を持ち、甘いもの食べ、立派な葬式をする」の

第一目標たる結婚のために働く無産支那人の努力は眞剣だ。石の上にも三年といふが三年でも五年でも、乃至は一生涯でも、食べたいものも食べず、やれ拜金宗ちや守銭奴と罵られながらも蓄へる。彼等の中には、目的の銀を得て楽しい結婚生活にゴールインする者もあれば、恵まれない人生を獨身で通す落伍者もある。この第一、第二目標に失敗した無産支那は、第三目標たる葬式金に全力を傾倒して、死後豫想外の大銀を残して居ることは決して珍らしくない。

昭和十年頃と記憶するが、邱と稱する支那人店員を雇つた。この店員は支那人としては珍らしく實直な男で、他の支那店員の二人分も働くから入店當時二十元の月給を支那事變の昭和十二年春には三十元に昇給してその勞を償つて居た。ところがその夏頃、邱「結婚しますから通勤を許してください」といふ申出があつたが、これで初めて他の支那人店員に較べてズバ抜けてよく働く謎が解けた。

結婚式場は大馬路の蘇州飯店で、當日は大型赤紙（招待状）をもつて生れて初めての支那結婚式に臨んだが、先づ驚かされたことは、僅か三十元の月收者が、わが中流以上の家庭にも匹敵するやうな堂々たる盛儀を擧げて居ることである。

わが國の婚禮から想像すれば、どう見てもこの全費用は二千元近いものであらう、いや、支那は諸式が安いから千元程度で済むかも知れない。何れにしても僅か三十元の月給とりが、如何してこの大銀を整へたか……筆者の腦裏は走馬燈のやうにこの謎が浮んで来る。然し謎は何處までも謎だ。支那結婚に初めて出席した筆者にはすべてが判らないものばかりである。

一週間ばかりの後、結婚後初めて出勤した邱を掴へて當日の謎を聞けば……「結納金五百元、結婚費用その他が五百五十元で、總計銀一千五十元也といへば、邱の月給三十元の三年分以上に相當する。而もこの大きな銀が大部分伯母の懐から出た」といふことであつた。

この結婚から見ても、支那人の結婚が如何に深刻なものであるか、支那には如何に多くの老いた童貞があるか想像に難くない。

わが上海特別陸戦隊の近くに「奴」といふ陸戦隊指定食堂がある。この店の支那人女給に花子といふ肉體美人が居るが、その夫と稱する支那人が、時々裏口に花子を呼び出して口論して居ることがある。その度毎に花子はブツ／＼言ひながら客席に戻つて来るが、何か餘程深い事情があるらしく、ある好奇心から花子に聞いて見ると……「彼女等は三百元の結婚金で數年前

結婚したが、夫に働きなく、結婚費に全部を費つたため生活苦に幻滅を感じ、結婚金を返し結して婚解消を申込んだがなか／＼先方が承知しないので、己むを得ず家を飛出して女給をして居る。といふのである。ところが男の云ひ分は、今更三百元返されても、次に妻を得るためには婚禮の費用が要るから再婚は覺束ない。それよりも一番簡単な元の鞘に治まつてくれ、と執拗シツコくいつて来る。然し花子としては、銀のない夫と同棲して生活に苦しむより、金持のお妻さんになつた方がどれほど幸福か知れないと、支那人は何處までも拜金支那であり、女は銀なりである。

## 二、支那宿

日本内地を旅行して、一番惱まされるのは旅館の茶代と祝儀である。近頃日本の旅館中にも茶代全廢、女中祝儀二割などと、判然り請求書に書込んで来る宿もあるから一概には言へないが、一般は舊態依然、チンチンした犬のやうに、茶代を當てにして居る宿の多いのには全く困

りものだ。

この茶代とか祝儀といふものは、宿泊者の身分相應といふものがあり、旅館にはまた旅館の格式があるから、種々の點を考慮して多からず少からずの中庸を割出すことは、一種の數學試験問題のやうなものである。

されば旅行中無用に頭を悩ましたり、出した後でヒヤ／＼するやうなことも尠くないし、場合によつては、茶代、祝儀、客引のチップが、宿料よりも遙かに多額にのぼることは珍らしくない。

殊に日本旅館の宿泊料などにも非常な矛盾がある。第一易者でもない宿の女中が、客の風采を一瞥したゞけで勝手に案内するのだから、望みの室は得られないのみか、食事なども満足を與へられないことが多く、おまけに出發間際の勘定まで宿泊料も知らないといふ呑氣なものである。

かういふすべての不合理な點を解消して満足第一主義としたのが支那宿だ。支那宿は極めて近代的で、すべての施設が客本位に出來て居るから氣持が良い。室料なども一々定價表があつ

て、ボーイの案内する多くの室の中で一番気に入つたのを選ぶことが出来る。

一旦室に入つたら食事は勿論、一切合財室内で用が辨ぜられ、一寸でも室外に出る必要はないし、ボーイのチップにしても特別に荒使ひしない限り勘定の二割も與へれば文句はない。また支那宿のボーイは八釜しい客ほど歓迎する、八釜しい客は必ずチップを多く奮發するからである。また一現の客に對してはチップが少くても苦情はいはないが、馴染の客や荒使ひした場合などは少額のチップではなかく承知しない。「先生も少し奮發してください」といつて堂々とチップの増額を要求する。

支那の生活面が、近い日本よりも却つて遠い歐米に類似せる關係上、すべての支那宿は日本のホテル式に出來て居る。

支那宿に馴れない人々は、南京蟲を怖れたり、盜難や甚だしきは暗殺されはしないか等と、不安を懷く人々もあるが、吾人の見聞した範圍では、日本人が支那宿で殺された事實は曾て耳にしないし、日本旅館と異つて各室毎に鍵があるから盜難の怖れ等も、絶無といつて差支へない。また南京蟲なども、日本内地と五十歩百歩、曾て朝鮮宿のオンドルで南京蟲の猛襲を受け

たやうなことは奥地旅行中一度も經驗したことはない。

支那宿に泊つて、一番執拗く勧められるのは賣笑婦だ。わが國に公娼があるやうに、エロチイシズムの支那では、宿屋に賣笑婦はつきものである。係りのボーイは、客の顔色を見ながら、手を替へ品を替へて持ちかけて来る。顔面筋を緩めて居たのでは果しがないから、大聲「不用」と言ひきることによつてボーイの攻撃はやめられる。

賣笑婦で引込んでチップだけだ。儲けることにかけては抜目のないボーイの新手は藝者である。旅のつれづれを慰めるには支那情緒を味はふのが一番愉快です等と持ちかけて来るから、遂々根負けと好奇心から、一度支那の田舎藝者に憂さ晴らしを求めることにした。

支那の藝者は、非常に見識が高く愛嬌がない。蔣政權の排日教育のせいでもあらうか、一種冷やかな態度で、どちらが客か藝者か判らないほど不愛想な處がある。眞の日本を認識しない彼女等までが、排日教育を鵜呑みにして「小さな島國日本が支那を奪る」など、とんでもない逆宣傳を眞に受けて、この東洋鬼子もその片割れか！といふ風に敵性を持つて居るかの如く見受けられる。だからこそ支那情緒を味はふ處か、却つて不快を催さずには居られない。それ

でも職務だけは自覺して居ると見えて、歌を所望されると伴奏氏の胡弓に合せて、獨特の豊かな支那情緒を味はせるが、まあ珍らしいといふだけで、日本人は矢張り四疊半の三味の音の方が、どれほどピントが合ふか判らない。

支那宿で夜通し惱まされるのは騒音だ。支那といふ國には特に暇人が多く、夜を徹する人種の多いのには驚くの外はない。殊に夏の夜は全室のドアが開け放され、賭博や麻雀に夜を徹する者もあれば、甲高い胡弓の音や廊下トントン等の雑音は、下手なジャズ以上、寝ぐるしい暑い夜の神経をいやが上にもたがぶらせる。凡そ支那人ほど遠慮のない人種はない。普通の會話でも喧嘩のやうに聞える、それが會食などで調子にでも乗つたらそれこそドンチャン騒ぎだ。この騒音以外、支那宿はすべての點で日本の旅館よりも遙かに近代的であることは斷言出来る。

### 三、招待の御馳走代は博奕のテラ

持てる支那人との交際ほど厄介千萬なものはない。彼等の日課は有り餘る銀と、退屈にもて

餘す暇を、如何してその日を面白をかしく享樂するかといふことばかり考へて居るらしい。かういふ有閑人は、他に對しても、自分同様に律するのだから仕末に負へない。大した用でもないので電話をかけて誘惑しようとするから、今日は忙しい用事があるといつて断れば、表にブー／＼と自動車の音がしたかと思へば、「お忙しいならお手傳ひませうか」と態々買ひ出しに來る。こちらの貧乏暇なしには一向お構ひなし、すべてが自分本意に行動するのだから勝てない。

林永銘先生も、かういふ方面で苦手の一人だ。林氏のオフィスはバンド裏セントラルの某ビル四階にあるが、そこに顔を見せる必要はなく、萬事支配人委せて遊び廻つて居れば、今日は！とも言はないで一萬元以上の大金が毎月轉げ込んで來る。

例によつてある日の午後二時頃かゝつて來た電話が林先生だ。午後二時過ぎでも林氏の第一聲は「お早う」である。歐米流にいへば何時でもお早うに相違ないが、林先生のお早うは、起床と同時にその日のプログラムを交渉するのだから正味のお早うだ。

林氏の要件は、中食を共にしたいからすぐ來い、といふのであつたが、内地の客が連絡船で



着くから今日に行けないと断つたら、それでは明日午後二時に、といふことになつた。

林家訪問には、特に立派なハイヤーが選ばれる。ボロ自動車では玄關に横づけの出来ないほどの屋敷である。庭園なども廣々とした芝生で、テニスコートもあればバトミンソンの設備もあつて、庭に面する娯楽場兼應接室などは至れり盡せり、主人公の豊かな趣味も覗はれる。

林氏は堂々二十三貫、見るからに精力絶倫の偉丈夫で、而も一流の交際家だけに柔か味があつて如才がない。暫くして食堂に案内されたが、何時見ても卓上山と積まれた山海の珍味には食欲をそゝられる、而も林家料理といふ自家自慢の家風料理で獨特のものだ。

林氏の肉林攻略は文字通り牛飲馬食、山なす珍味をシャンパンで流し込む健啖、普通支那人には健啖家は多いが飲酒家は珍らしいといはれて居るが、林氏等は二刀流を通り越した三刀流飲酒健啖の上に精力絶倫であることは、第七號夫人の名に於て明かである。

七名の愛妾中第六夫人までが、いとも仲よく本邸に同居生活して居るが、よくこんな吳越が角突き合はせず同舟に甘んじて居る處、妾の方面から見ても支那は謎の國である。

食後一時間ばかりバトミンソンの競技で腹をこなし、それから第七號夫人宅に案内された。第

七號夫人は芳紀正に十八歳、最近まで藝者をして居たが、初老に近い林氏が大金を擲つて手活の花とした蘇州生れの美形で、知らぬ人は「お孫さんですか」と失禮するほど若々しい。

二人の相伴役が呼ばれ、今度はまた料理屋仕出しの御馳走が山と積まれた。暫くして數名の藝者と幫間が呼ばれ、支那情緒豊かなドンチャン騒ぎが數時間続いたが、やゝ倦怠を覺ゆる頃藝者幫間は總退却、同時に持出されたのは例によつて麻雀テーブルである。

支那麻雀の計算法は、日本計算の三倍と見れば間違ひない。而も金持等の賭金はとつともない大きなもので、千點五十元は最低、場合によつては五百元から一千元になるやうなことは珍らしくない。最低の千點五十元で遊んでも、支那麻雀では一寸悪運に見舞はれると一萬點負け込むのは朝飯前だから、少くとも五百元の用意が必要である。

競技中は毎回勝者の収入から一割がテラ箱に納められるが、支那式計算では、平和ピンホウで榮アガつても四百點で、二十元を得ると同時にテラ箱に一割の二元を入れねばならぬ。支那式麻雀は、すべて八莊を一勝負とするが、このテラ錢が何と百六十元に達して居た。このテラ錢によつて宴會費を拂ひ、残つた全部が席料として第七號夫人の收得となる。

されば折角御馳走に招待されても、麻雀に負けたら宴會費用を持つたことになる、また招待した方は山海の珍味を饗應し、藝者をあげて大盡遊びをしても、麻雀に勝てば費用は勿論妾の金儲けになる。これなどは招待ではなくて御馳走代を賭ける麻雀賭博以外の何ものでもなし。

然し、有り餘るほど銀を持つて居る林氏にすれば、金錢等は問題ではない。その日／＼を如何に面白をかしく享樂するかゞ問題である。されば毎日起床と同時にその日のプログラムを作るべく見當をつけて電話で買出すのである。かういふ持てる支那の鋭鋒を敬遠する貧乏人の努力もまた故なきにあらずである。

#### 四、野 鷄 狩

野鷄は野に居る鷄の意で、支那の私娼群が街頭に獲物を漁るさまが、丁度野放しの鷄を髣髴させるものがあるところからつけられた名である。

第一次上海事變後、蔣介石の新生活運動によつて、私娼の街頭進出禁止となるまでの支那街、特に大馬路一帯は賣笑婦の氾濫で、その跳梁は一般通行者の歩行を困難ならしむるほど猛烈なものであつた。

上海ダービーで有名な大馬路西端の競馬場から南へ一直線、大上海の玄關口たるバンドに至る四馬路は、日没頃から幾千とも知れぬ野鷄群が、通行者の手や服を引張り、帽子や手提類を奪ふなど亂暴狼藉至らざるはなく、夜を徹して人肉市場の修羅場と化して居た。この四馬路は南京路と共に大上海中一番賑つた繁華街で、南京路が晝の街なら四馬路は夜の街として、終夜殷賑を極める不夜城、エロの街としては名實共に上海隨一の繁華街である。

ところが、この上海名物夜の街も新生活運動の彈壓を喰つて、野鷄の稼場は屋内に限られることになり、大世界、新世界等の娛樂場や、劇場、飯店、デパート、茶館、賭博場等を根城とせねばならぬやうになり、往年華かなりし上海名物四馬路の野鷄狩も、遂に過去の物語となつてしまつた。

上海事變の前年、野鷄狩の最も華かなりし頃、上海來演の某レビュー團支配人某君の懇望に

よつて、ブリュー・バードで散々踊つた後を支那情緒を満喫すべく不夜城四馬路の野鷄狩に突進した。

バンドで車を捨てるのと四馬路から西に向つて一本道、競馬場までが野鷄の巢となつて居る。江西路角や山西路あたりまでは三々五々、路次奥から「ハロー」、「ヤー」、「アナタ」、「シーサン」等、色々の國際語が飛び出して來るに過ぎないが、湖北路角を過ぎる頃から漸次野鷄は群をなして歩道にまで進出し狂態の限りを盡す暴威を奮ふ。

舗道の眞中を用心しながら歩かないと帽子を奪られる懼れがある。何か持物を奪られたら最後牛に引かれて善光寺参りの無理往生だ。ところが、兩エロハンターは、何でも良いと言ふ生柔しい目的ではない、目指すは蘇州美人か揚州美人、支那の代表的逸物、現代楊貴妃と言ふ大望？がある以上、とんでもない代物に帽子を奪られて泥田に足突込むやうではこの壯圖？の意味ないから用心堅固、道路の眞中を顔面筋をひきしめて女嫌ひの君子のやうに正面きつて歩いて居るが、目だけは電光のやうに兩側の野鷄を射て居る。

浙江路角を過ぎてまだまだ目的の逸物を見ない、有名な天蟾劇場を後に遂々獲物なしで大馬路

の競馬場に出てしまつた。曾て某通人の話に、街頭に居る野鷄は三流どころで、一流の美形は進出しない、と言ふことを思ひ出し、今度はデパートやダンスホール、茶館などを片端しから素見して見たが、何しろ望が望み丈けになか／＼御意に召さないドン栗揃ひ、もう今夜は駄目だ引揚げようと、觀念したトタンに眼前に横はる大中華飯店のダンスホールに入つて目指す逸物をキヤツチすることが出來た。

支那一流ホテルたる大中華飯店のダンスホールはなか／＼廣々たるもので、ダンスの殿堂としては至れり盡せり、居並ぶダンサーは百名に近く、なかには數名の邦人ダンサーの顔も混つて居る。

靜かに流れて來るジャズに乗つてワルツやタンゴに軽いステップを踏みながら、この現代楊貴妃を抱擁する気分は天國に遊ぶ恍惚境だ。踊りながら彼女の生國を聞けば蘇州！アツ彼女は蘇州美人だ!! 吾等の抱擁する彼女こそ支那隨一の蘇州美人!

日本にも美人系があるやうに、支那では蘇州と揚州を二大美人系といはれ、揚州を島原や天草美人に例ゆれば、蘇州美人は京美人である。自ら備はる氣品の氣高さでは、支那の何處にも



三、X的満足を得るため、如何に女性を改造すべきか。

といふやうな男性の勝手な慾望から生れた蠻風に外ならぬ。

蔣政權が、纏足は非文明的で、支那の向上を阻害する悪弊であるのみならず、國の恥辱であるといつて、新生活運動などで嚴にこれを禁止した結果、都會地に於ける若い婦人には殆んど見られなくなつてしまつたが、田舎に行けば、まだ纏足が舊態依然として流行して居る。殊に山西省の大同あたりでは、年に一回、光脚會といふ纏足の展覽會が開催されるが、何時も壓倒的人氣を呼んで居る。支那事變の前まで山西省主席だつた閻錫山が、この悪弊打破に躍起となつて居たが、やはり纏足しなければ良い女にならないといふ觀念だけは除去し得なかつたらしい。

以前支那では婦人の美を見るのに、先づ第一に足を見てから顔を見たものだが、纏足の展覽會等は、日本の馬市のやうに相當盛況を呈し、羞恥屋の支那婦人も、この日はかりは得々として居る。

纏足女の過激な運動の出来ないことはいふまでもないことで、第一歩くことすらもなかなか不自由である。造物の神から何不自由もない肢體を與へられながら、故意に不具者となつて一生をトウ・ダンスで暮らす等は沙汰の限りといはねばならぬ。

然しこの蠻風も、新生活運動と西洋文明の力によつて段々影を潜め、生活状態の變動は支那女性を深窓から追ひ出し、勢ひ社交的となり、所謂摩登支那の新らしい女性時代を劃するに至つた。抗日支那の牛賣り損ねる宋美齡こそは、現代支那の代表的新らしい女性として、新らしい支那婦人の崇拜的となつて居る。

古來支那では、「蘇州の髪、揚州の足」といつて、揚州美人の足は代表的なものといはれて居る。廣東方面で妾を買ふ時は、下見をした後、靴を脱がせて足を見るが、現代支那では、纏足しない普通の足で、土つかずは一番上等、ベタ足は鴨脚といつて一番嫌はれ者で、いくら顔が美しくても値が安い。總體に支那人は、變態的に足に興味をもち、異常な猥褻味を感じる國民のやうに思はれる。

何が支那婦人をしてこの不自由を敢てさせたかといへば

一、一種の玩弄物として愛撫可憐な感を催する處情緒的である。

一、歩く姿を蓮歩といひ、蓮の花の揺れる様を形容し、楚々として風情あり、好色をそゝり惱ましきものである。

一、一旦嫁すればその家を去らない足枷を意味する。

一、腿部、腰部の筋肉が異状に發達するため好色家に満足を與へる。

一、労働者にあらざることを示す一種の虚榮。

一、支那の男性は婦人の外出を嫌ふ風習があり、不自由な足によつて自由奔放な婦人の外出を禁じた。

上述の諸項によつて、纏足はこよなく重寶がられ、好色支那の愛玩を得て來たのである。

支那上流婦人の一人歩きは出來ない。二人の人の肩を杖として、天賦の足の使命を捨て、義足によつて一生をトウ・ダンスで暮らすといふ、この愚にもつかぬ矛盾は人道由々しきこととして、蔣政權の新生活運動の槍玉にあがつたのは當然といふより、寧ろ遲きに失する。

小春日和のある朗らかな日に、よき暮参日和とばかり、打連れだつた十數名の纏足婦人の一隊が、蘇州河畔の廣東墓地へ行く途中、日本人の引いた一匹のセバードが、如何思つたか突然

纏足團に向つて吠え出した。吃驚仰天、逃げ惑ふ足の不自由な纏足群の、得もいはいれぬ狼狽した恰好は天下の奇觀！ 犬に追ひまくられる家鴨群さながらのナンセンスな場面を展開した。

落ちさうで、落ちさうで、なか／＼落ちぬ。見て居る方がハラ／＼させられながらも一番面白いのは纏足女船頭である。虹ロクリークは毎日何十艘かの肥船が、工部局糞尿碼頭に集る虹ロ一帯の人糞を船で田舎へ持つて行くが、狭いクリークでおまけに曲りくねつた急流、而も船頭は大抵老人か女船頭である。狭いクリークを曲る度毎に舟縁で竹竿を使ふ纏足女船頭の輕妙なさばき、僅か五寸ばかりの舟縁を飛燕のやうに駈け廻る様は輕業師の綱渡り以上、馴れとはいひながら天晴れな手の内、見て居る方が却つて冷汗をかゝされる。

近代女性は、世界一樣に女性の商品化打破の狼煙をあげ、男子の隸屬的壓迫から解放を叫び出したが、殊に隣邦支那では宋美齡型を禮讚し、女權の擴張に大童となつて居る。

先年日本で開かれた太平洋會議に於ける、席上紅一點の支那婦人代表が「各國婦人が集るといふので來たが、婦人は自分一人ではないか、これでは全くペテンにかゝつたやうなものだ」と大見得を切つて、勇敢マダム振りを見せたのは、近代支那の新らしき女性の聲である。この風

潮によつて、男子の玩弄物的纏足は否認され、蔣政權の新生活運動と相俟つて妙齡の婦人には殆んど纏足を見ず、勇しく強い天然足は、舊支那打破のシンボルの如く、唐代以來十世紀續いて來た纏足は次第に影を潜め、次の時代には「纏足」は歴史に残る昔語りとなるであらう。

## 六、歡樂境大世界

上海一日の清遊を、最も安價に支那情緒を満喫させるものは上海名所「大世界」である。

上海隨一の歡樂境、プロレタリア支那人のホープ大世界は、共同租界と佛租界の接する所、佛租界内にあり、西の廣場こそは、上海ダービー、二十萬弗の賞金で有名な大馬路の競馬場である。

この大世界を日本は勿論、全世界に紹介したのは、支那事變の中支衝突の第二日、支那空軍の盲彈に三百の死者と八百の傷者を出し、歡樂場變じて修羅場となる大悲劇を展開、一躍世界の大世界となつてしまつた。

大世界とは何かといへば一昔前に於ける東京の花屋敷、大阪の樂天地を思へば間違ひない。即ち僅か二十仙で、映畫から芝居、講談、落語、奇術その他あらゆる見物が出来る、プロレタリア一日の清遊にはこれほど便利なところはない。

大世界内には、數年前までは種々な賭博が開帳され、極く近年までルーレットと稱する三十六文字記入の賭博が開帳されて居たが、新生活運動の斷壓で見られなくなつてしまつた。場内で一番目を引くものは、このあたりを根城とする野鷄（賣笑婦）群だ。數百の街の天使等が、鴉婆ヤババを伴つて右往左往しながら獲物を漁り歩く様は、上海を知らない人々にはとても想像出来ない。彼女等の探すものは鼻下長先生シヤウシヤウだ。一寸顔面筋を緩めたが最後、狐に油揚げを見せたやうに何處までもつき纏ふ。囁んで吐き出すやうに、大聲一番「不用ブヨウ」といふ迄は彼女等の追及から逃れることは出来ない。

場内入口の正面が映畫館で、一番大衆性のある映畫といへば、時代物では猿が出たり豚が出て來る西遊記、煙と共に消える忍術ものが多く、荒唐無稽、小供瞞しのやうな、日本でいへば大正初期の尾上松之助や澤村四郎五郎の忍術映畫を髣髴させるが、これ等が支那大衆のレベル

に迎合されると見えて、出しものは何處の映畫も芝居も大同小異、この種のもものが大流行である。

近代支那で一番受けの良いのは、「火燒紅蓮寺」、「西遊記」、「七劍十三俠」といつたやうなもので、十年一日の如く上演される處、わが忠臣蔵、水戸黃門、幕末ものゝやうに大衆性がある。

二階へ上ると右手の小舞臺にはチャップリン紳士が、幼稚な手つきで奇術の真最中、何が面白いのか他愛もない演技に「好！好！」と、割れるやうな拍手を送つて居る。

奇術の隣りは講談落語席、福徳圓滿先生が、大聲で唸りながら踊つたり跳ねたりして居る。

跳ねる度毎に足下に仕掛けられた音楽がジャン／＼、ガタ／＼と騒々しいこと夥しい。支那の落語は、日本落語の三味線太鼓の分まで一人三役のスピードアップである。

左側の大舞臺には、梅蘭芳振りの美人が踊つたり、關羽髯が出て來たり、青龍刀や薙刀を持つた勇士がゾロ／＼出て來るが、吾々日本人には如何もビントがあはない。

バルコニーから下の大廣場を見下ろせば、支那獨特の輕業の妙技が始まつて居る。猿のやう

に身軽く自由自在に跳ね廻る宙返り、蜻蛉返り、大力男が機銃の様に繰り出す手練の槍先、精妙にかはす飛燕の早業、風車の如く打ちふる大薙刀、火花を散らす青龍刀の劍劇、山東太鼓と共に踊る一人劍劇、兩端に大石をつけた大竹を輕々と持ちあげる大力士等、々……、觀衆は一齊に大喝采「好！好！」の連發だ。

大世界の全部は優に一日がかりの盛澤山なものだ。年が年中、こゝだけは不景氣知らず、支那隨一の盛場である。この大世界が抗日支那の犠牲に、千百の死傷者を出した慘狀がマザ／＼と腦裏に浮んで來る。

## 七、茶館

近代都市上海には、各國各様、その經營主の國別によつて種々の特色をもつカフェーやパブ、喫茶店等があるが、支那獨特の喫茶店たる「茶館」は、他國では見ることの出來ない純喫茶で、支那街の至る處にあり、毎日大入滿員の盛況を呈して居る。



茶館は讀んで字の如く茶を飲ませる家であつて、普通の喫茶店と異なる處は、單に支那茶を飲ませるだけで、菓子も勿論、洋茶も果物もない純喫茶である。

茶館に客のない時ほど殺風景なものはない。大きな室にテーブルと椅子があるだけで何一つ裝飾は施されてない。恰るで空家にテーブルと椅子を据えたやうなものである。勿論テーブルにつかねば茶も出ないから茶代を拂ふことはない。されば用もない支那の暇人が、素見旁々室内をグル／＼廻るといふ風で、何時行つても立錫の餘地もない大入満員である。

茶館の茶代は普通小洋二十仙が相場で、茶を飲みながら相當長い時間を休憩することが出来る。また一流の茶館にはステイチがあつて、藝者が歌つたり、蓄音器その他の音楽を放送するから、最も安價に支那情緒を味はふことが出来る。

茶館は清朝時代から多く商談に利用され、社交や待合の役目も果たすといふ、その利用範圍は相當廣い。

上海で一番茶館の多いところは大馬路一帯で、日没頃から盛裝した野鷄(賣笑婦)が現れ、誰彼なしに取引の交渉をして廻る。交渉成立の鼻下長先生は得意満面、惠比須が鯛釣つたやう

顔して、野鷄を引つぱつて茶館を出て行く様はどこまでも支那式だ。

ラツシニアワーには、それこそ立錫の餘地もない超満員、従つてその騒々しさは言語に絶するものがある。日本人などは、こんな騒々しい處では商談などは眞平だが、何事にも解放的な支那さんは陽氣な所が好き、商取引から社交、會合、素見、休憩、さてはランデヴーからエロのハントにそれ／＼利用されるから、この安價な安息所は連日超満員、現在なほ歐米風の喫茶店を尻目に押すな押すなの盛況を呈して居る。

昭和十五年十月五日印刷  
昭和十五年十月十日發行

支那の生活

【定價壹圓五拾錢】

著者 平木多嘉志

發行者 藤岡孫一  
東京市芝區新橋四ノ四六



印刷者 岡田安德  
東京市牛込區水道町一一

發行所

東京市芝區新橋四ノ四六  
振替東京三九一三〇番  
電話芝(43)一九五一番

昭和書房

書評好・房書和昭

福田清人著

松花江

四六判二五〇頁 價一・五〇 送〇六

松花江——滿洲の曠野を横斷するこの大河は大陸の逞しき動脈である。永遠に黄色い流れには近代的な河船が水車式推進機で航行する。著者の躍動する精神はこの大動脈と交流し、ハルビンの鋪道に、曠野の開拓地に高原の義勇軍訓練所に展開される新しき國、新しき人の姿を描破する。

G・E・ミラー著 市木亮譯

上海租界

四六判三五〇頁 價一・五〇 送一〇

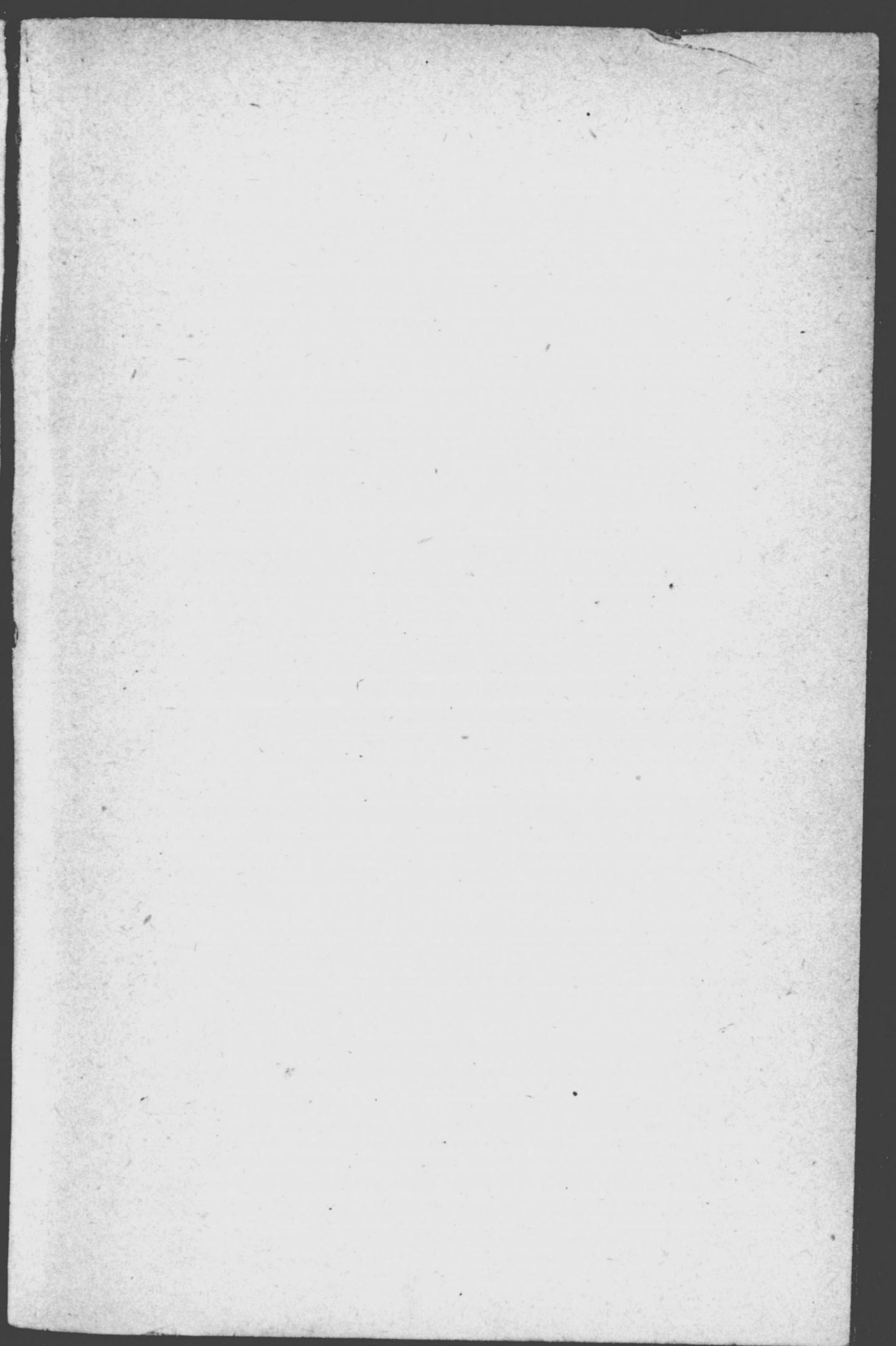
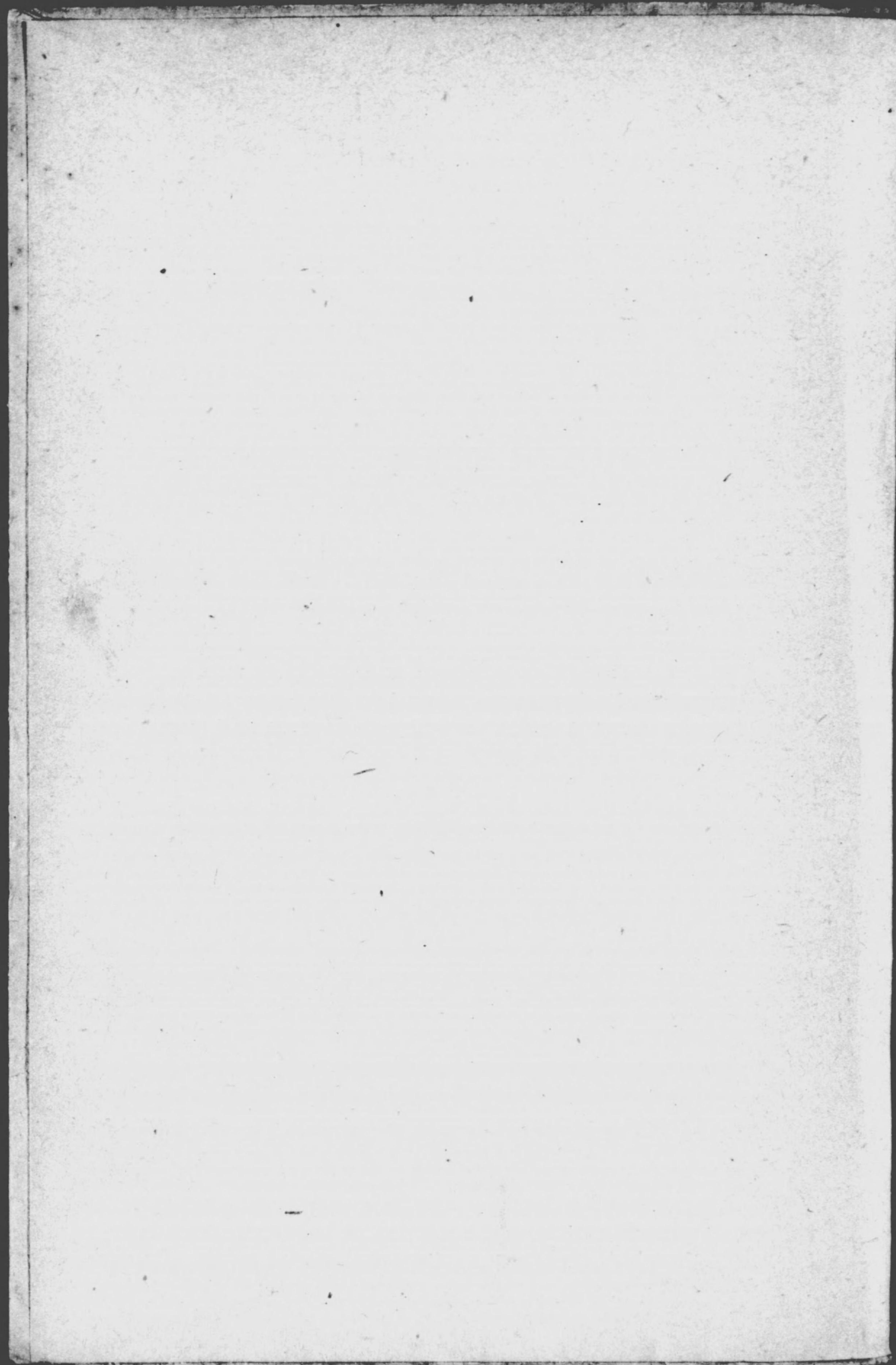
東洋の魔都上海！上海の魔窟租界！租界こそ支那のガンだ本書の著者ミラーはアメリカ一流の新聞記者であると共に外交官である。この恵まれた地位にあつて、著者の犀利な眼は何ものも見逃さない。上海を描いた著書は多いが、その的確さと大膽さとに於いて、本書は斷然他を壓してゐる。

松永健哉著

南支戦線 教育從軍記

四六判二六〇頁 價一・二〇 送〇六

本書は教育者の眼を以つて見た戰場記録である。殊にバイアス灣に上陸して南寧攻略の第一線に立つまで、宣撫班に於てあらゆる勞苦をなめ乍ら街頭宣撫に當つてゐた著者が身を以つてした體驗と見聞から支那大陸の教育問題を克明に集めた記録である。





¥ 1.50